

大学生が学術論文を書くという価値

著者	橋 希元
雑誌名	食品と容器
巻	58
号	12
ページ	714-715
発行年	2017-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00001661/

大学生が学術論文を書くという価値

高橋 希元

(東京海洋大学食品生産科学部門博士研究員)

1. はじめに

筆者は東京海洋大学の食品生産科学科に入学し、水産食品の研究を行い2017年3月に同大学院で博士号を取得しました。現在も、博士研究員として同じ大学に勤務しています。その約10年間、自分自身が学生として、時に研究室の先輩や指導する側として、数多くの学生が何を目的に大学に入学するのか、また学ぶのかということを感じ、そして観察してきました。

学生が大学生活の中で何を学ぶべきかという議論はさまざまになされていますが、理想はともかく現実の学生が目標とするのは、賛否両論あれども、なんとんでも断トツに就職です。一方で、大学における学生への教育内容は必ずしも就職に直結しません。そのギャップに学生は迷い「大学院に行くべきか、否か」という質問に変換されます。その質問を受けた際の筆者の答えは決まっています「大学院に進学が許されるのであれば、進学すべきだ」。やはり大学院に進学し研究をすること、そのハイライトとして、学術論文を発表するというのは、就活とは異なる得難い経験があるように思います。この場合、大学院とは博士前期課程のことを指します。博士後期課程にまで進むと、就職が限られるため、進学者はほとんどいません(筆者の時も、同じ学科では1人きりでした)。

もちろんこれは東京海洋大学における筆者の経験によるという、極めて限定された条件下での話であり、また経済的事情や向き不向きといった別の理由で進学しない学生もいますから、大学院進学が絶対の正解だということはありませんし、ありえません。しかし、大学院を修了して間もないこの時期に、編集部から何を書いてもよろしいという心温まるご依頼をいただいたために、いつか

誰かの役に立つかもしれないという、甚だお節介な誘惑に駆られ、学生として学術論文を書いたことへの思いを記録することにしました。

2. 学術論文とは何か

そもそも一般には、学術論文とは何か、ご存じない方も多いかと思います。厳密な規定はないのですが、本稿で取り上げたいのは狭義の意味での学術論文、つまり研究者独自の成果が査読付きの学術誌に掲載されたものです。原著論文と呼ぶこともあります。

研究者は研究により良い結果が得られると、それらを論文用の原稿にまとめ、学術誌に投稿します。学術誌は分野ごとに数多くありますので、その論文の内容に合うものに投稿する必要があります。例えば筆者であれば水産食品加工学が専門となりますので、論文を日本語で書いたならば日本水産学会誌、英文ならばLWT—Food Science and TechnologyやFisheries Scienceなどがターゲットになります。

投稿された論文は、編集部(あるいは編集委員)が選定した複数の査読者(それぞれの分野の専門家)のもとに送られ、雑誌への掲載可否について、審査を受けます。この審査過程を査読(英語でPeer review)と呼びます。査読により、内容の新規性、論理性および実験方法の妥当性などが評価されるわけです。査読の有無は、学術論文の価値にとって決定的な違いを生みます。研究者の業績として評価されるのは、査読有りの論文です。査読がされない論文は、基本的には高い評価を得られません。大学において学部に所属する学生が論文を書くというと、一般的には卒業単位の要件となる卒業論文を指します。しかし卒業論文を学術論文とは見なしません。大学院の学生が学位取

得のために書く修士論文や博士論文も同様です。

通常いわゆる理系の論文は著者が複数になる場合が多く、その中で最も重要なのが論文全てに責任を持つ責任著者 (Corresponding author) です。次に実際に研究において主導的な役割を果たし論文を執筆したとみなされるのは、筆頭著者 (First author) となります。学生が学術論文を書くと、大抵の場合は筆頭著者となり、指導教員が責任著者になります。

3. 大学生が学術論文を書く価値

結論から書けば、学生が学生であるうちは、学術論文の本当の価値を理解するのは難しいかもしれません。博士後期課程に進学し、研究者を目指す学生は、発表した学術論文の数や質が、そのまま将来への門をこじ開ける鍵になります。しかし研究者を目標とせず、通常の就活をする多くの学生の場合、筆頭著者として学術論文を発表する意味を見いだすことが困難です。

大学生のうち4年間で卒業する学部学生には、学術論文を書く時間があまりにも少ないのが現状です。1年生から3年生までは研究以前の基礎の座学が中心になりますし、研究室配属後の3年生の終わりごろから4年生の前半までは、就職活動に明け暮れます。就職先から内定が得られれば、今度は卒業研究をし、卒業論文を書かなければなりません。一方で、博士前期課程において修士の学位を取得する大学院生の中には、専門の学術誌に論文が掲載される学生がいます。とはいえ、それはやはり少数派です。

学生が初めて書いた論文は、大概内容が滅茶苦茶でそのまま学術誌に投稿しても、まず受理されません。学生と指導する側とのマンツーマンの修正作業が必要ですが、これが学生にとっても指導する側にとっても非常に大変です。期間も数カ月には及びますので、技術的にも、精神的にも厳しい。筆者の場合も1本目の論文を書くのが一番苦しかった記憶があります(半年近くかかりました)。何度も指導教員とやり取りをして、同じところで躓いて、原稿用紙を切り裂きたい誘惑に駆られました(コンピューター上の電子ファイルなので物

理的に不可能であったことが幸いしました)。

このように学生が限られた時間の中で学術論文を発表するハードルは高い一方で、やる気を起こさせる燃料は少ないのが現状ですが、唯一具体的なメリットとして、奨学金返済の免除があります。大学院生の場合、在学中に優れた業績を挙げると、奨学金界の中で最もメジャーな日本学生支援機構 (JASSO) の第一種奨学金の返済が免除(全額、もしくは半額)になる制度があります。この優れた業績というのは、大学院の授業で良い成績をあげたといったような事はあまり評価されず、学術誌に掲載された学術論文や国内外での学会発表が対象となります。特に学術論文の評価は高く、学会発表の何倍も価値があるということになっています。実際、奨学金の返済免除を目標にすると、刹那的ではありますが学生はやる気を出します(筆者もそうでした)。学会発表にも積極的になりますし、学術論文もどんどん書こうとします。筆者の最初の論文が査読後掲載可となったのは博士後期課程に入学後でしたが、奨学金の返済免除を目標に、修士課程で筆頭著者として2報の論文を書いた学生を知っています。これは結構すごいことです。

しかし卒業後、今になって振り返ってみれば、やはり研究をして学術論文を書くことの価値は、そこにはないことに気づくのです。これは何も博士後期課程を修了したからというわけではなく、修士の学位をとって博士前期課程で修了した学生も、あるいは論文を発表しなかったけれど学部でしっかりと研究をして卒業した学生でも似た気持ちを持つようです。もちろん奨学金の返済を免除してもらえれば、それはうれしい。でも、それとは別に、研究により誰も知らない未知の結果を得られたこと。たとえ学生であったとしても自分が研究者となった瞬間、わずかな隙間の研究領域であったかもしれないけれど、その時間、その時点では世界で唯一誰も見知らぬ地平を切り拓いたこと。学生が書いた学術論文は、その微かな記憶のアルバムとして、内容の是非といった外部の評価とは別次元の機能により、卒業後の我々の歩みを見守り、勇気づけてくれるのです。